

近代文学研究叢書

第二十九卷

昭和43年10月25日 印刷
昭和43年10月30日 出版
昭和48年8月20日 再版

[¥ 2500]

著 者

昭和女子大学近代文学研究室

発行者

東京都世田谷区太子堂一丁目七番地
小林寅次

印刷者

東京都千代田区神田錦町三丁目十四番地
梶原忠幸

発行所

東京都世田谷区太子堂一丁目七番地
昭和女子大学近代文化研究所
振替口座東京一七〇八六七番
電話代表(422)五一三一番

近代文学研究叢書

第二十九卷

昭和女子大学

近代文学研究室

監

修

吉村本保人浜能成中内辻玉島山佐佐笹佐坂木河金片萩岡太上石石池

田松間見勢瀬林井田伯藤沢々本鱧子桐原田井森田田
坂徳藤村宮木由保井保
澄定久円頼正謙幸謹梅幹美八五実健顯泉三磯延吉龜

夫孝雄都吉郎賢勝二濯鑑助二允友二明郎郎修英二智水生郎吉男貞鑑

(国語学)(近代文学)(国文学)(近代文学)(国語学)(近代文学)(英文学)(英文学)(国文学)(比較文学)(英文学)(国文学)(独文学)(国文学)(和歌文学)(歴史学)(英文学)(和歌文学)(近代文学)(比較文学)(英文学)(児童文学)(国文学)(国文学)

口 繪 写 真

南
日
恒
太
郎

葛
西
善
藏

長
谷
川
零
餘
子

若
山
牧
水

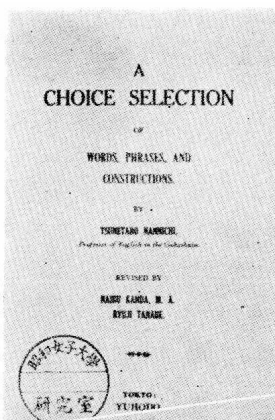
廣
津
柳
浪

南 日 恒 太 郎

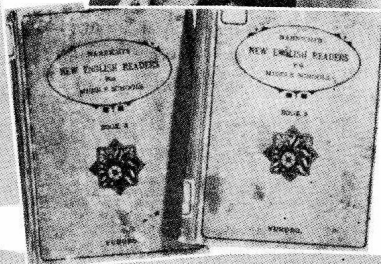
恒 太 郎 肖 像



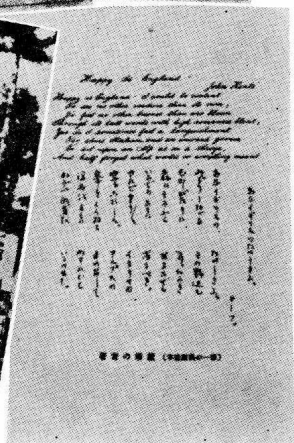
長生殿裏春秋富
不老門外日月遲



「新英文法解釈」(チヨイス・セレクトション・オブ・
ワーズ・フレイジーズ・アンド・コンストラクション
ズ)——明治三十八年六月刊
(昭和女子大学蔵)



「英文藻塩草」——大正五年六月刊
(昭和女子大学蔵)
「英詩藻塩草」——大正五年七月刊
(昭和女子大学蔵)



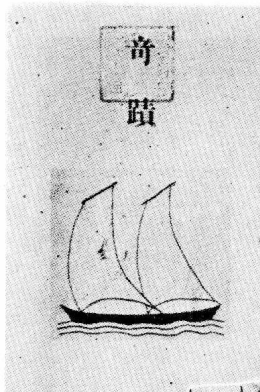
「英和熟語大辞典」——明治四十二年十二月刊
(昭和女子大学蔵)

富山市にある恒太郎の墓

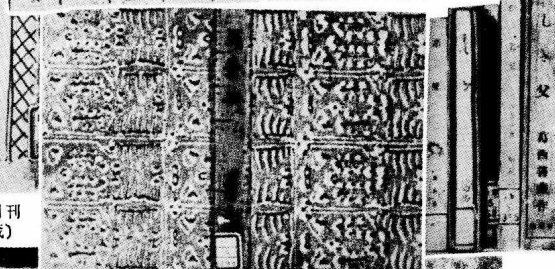
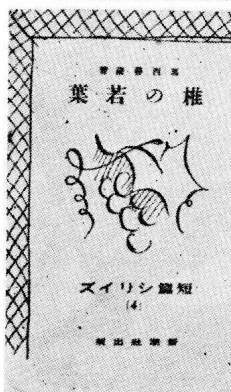
「ニュー・イングリッシュ・リーダー」
——大正四年十月刊「英詩藻塩草」の原稿
(昭和女子大学蔵)

葛西善蔵

「子をつれて」——大正八年三月刊
 (昭和女子大学蔵)
 上段中——善蔵筆蹟(葛西つる蔵)
 善蔵肖像



「哀しき父」——大正十一年九月刊
 「悪魔」——大正十二年一月刊(以上昭和女子大学蔵)
 中央——「葛西善蔵全集」一〜五巻(昭和三年七月〜四年六月刊(昭和女子大学蔵))



三段中——「馬糞石」——大正九年一月刊(昭和女子大学蔵)



青森県南津軽郡碓ヶ関の文学碑

つる未亡人と善蔵の墓(徳増寺境内)

同人雑誌「奇蹟」創刊号(明治四十五年九月刊)
 (早稲田大学図書館蔵)

長谷川零餘子

零餘子肖像



「枯野」追悼号

昭和三年九月号

(昭和女子大学蔵)

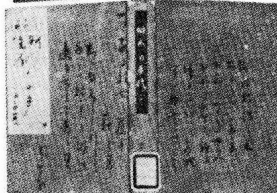
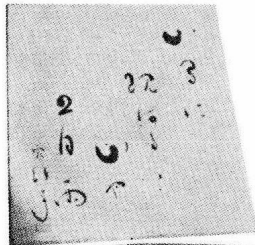
下段左「新註俳人の手紙」
—大正七年七月刊

(昭和女子大学蔵)

福相寺境内の句碑



東京都杉並区堀ノ内福相寺内の長谷川家の墓



零餘子筆跡(長谷川かな女氏蔵)

中段右「零餘子句集」—昭和七年一月刊

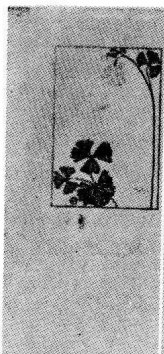
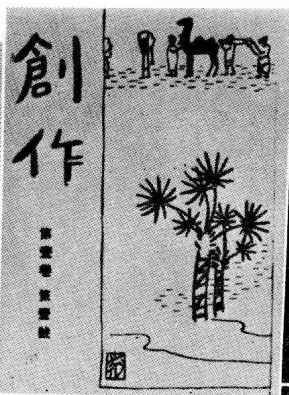
(昭和女子大学蔵)

「雑草」—大正十三年六月刊(昭和女子大学蔵)
中段中「近代俳句史論」—大正十一年六月刊

(昭和女子大学蔵)

水 牧 山 若

牧 水 肖 像

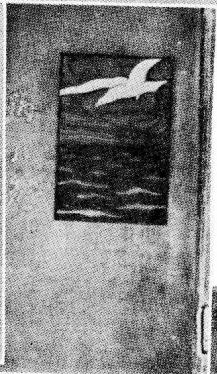
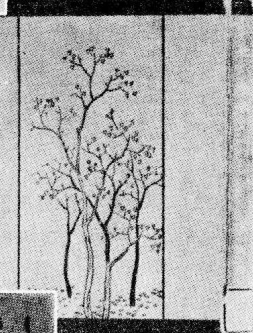


上段中—雑誌「創作」—明治四十三年三月号

上段左—「別離」—明治四十三年四月刊
(昭和女子大学蔵)

中段右—「死か芸術か」—大正元年九月刊
(昭和女子大学蔵)

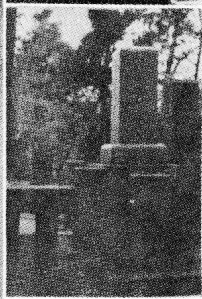
(昭和女子大学蔵)



中段中—「海の声」—明治四十一年七月刊

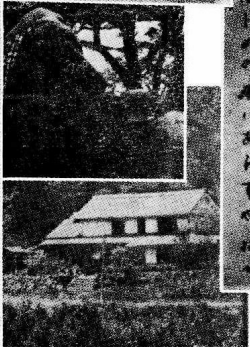
中段左—「山桜の歌」—大正十二年五月刊
(昭和女子大学蔵)

(昭和女子大学蔵)



栗運寺(沼津市出口町)の牧水の墓

「山桜の歌」の歌にありし四月の
春は下りの舟にありし四月の



↑ 牧水筆跡



「和歌講話」—大正六年二月刊

(昭和女子大学蔵)

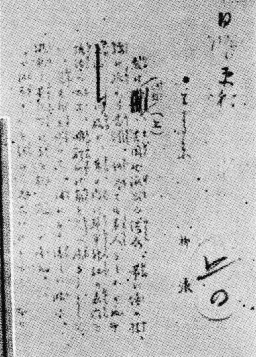
上は千本松原に建つ歌碑，下は宮崎県東臼杵郡東郷村坪谷の生家

浪 柳 津 廣

柳浪肖像



「そまる糸」の原稿（昭和女子大学蔵）



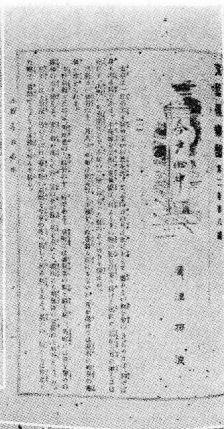
（昭和女子大学蔵）



←「女子参政会中楼」
明治二十二年十月刊
（昭和女子大学蔵）

上段中—「文芸倶楽部」（明治二十九年七月）
に所載の「今戸心中」（昭和女子大学蔵）

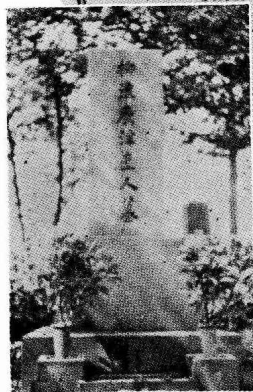
中段中—「柳浪傑作集」一大正四年八月刊（昭和女子大学蔵）



「新著百種」（明治二十二年十月）に所載の「残集」
（昭和女子大学蔵）



「柳浪叢書」前編—明治四十二年十二月刊
（昭和女子大学蔵）



谷中霊園28号10側にある柳浪の墓

目次

口	第二十九卷の成立	昭和女子大学近代文学研究室……(一〇)
凡	例	昭和女子大学編集室……(一五)
南	日恒太郎	近代文学研究室……(一七)
葛	西善藏	近代文学研究室……(二五)
長	谷川零餘子	近代文学研究室……(二五)
若	山牧水	近代文学研究室……(二〇三)
廣	津柳浪	近代文学研究室……(三七)
近代	文芸年表(29)	近代文学研究室……(四九)
卷末	付記	近代文学研究叢書編集室……(五五)

第二十九卷の成立

本巻は昭和期第四巻として、昭和三年七月から同年十月までに歿した左記五名の研究調査を収めた。

南日恒太郎は、明治四年（一八七二）九月三十日、富山県上新川郡山室村に生まれた。富山中学を経て四高予科一級に入学を志したが、眼を患って進学を断念。中村敬字の「西国立志編」を読んで感ずるところあり、日課を定めて国漢文、英語などを独学で修めた。「少年文庫」に楓楠軒主人の筆名で「文海涓滴」を掲載、鷗外宛に送った訳詩、スコット原作驚夢生訳「羅馬城跡の花を採りて貴女に捧ぐとて」は「しがらみ草紙」に掲載。

二十六年中等教員国語科検定試験に合格、同年母校富山尋常中学助教諭となり国語を担当した。二十九年英語の検定試験に合格、芝の正則中学に教鞭をとり、ついで三高予科講師となった。三十五年学習院教授に任ぜられ、津田英字塾及び専修大学に出講。かたわら「難問分類英文詳解」「分類和文英訳法」「英文解釈法」「和文英訳法」等の参考書、「英和雙解熟語大辞典」「袖珍英和辞典」能本謙二郎共著の「モダン英和辞典」等の辞書ならびに、

'New English Course' 3 vols, 'New English Readers for Middle School's, 5 vols, 'Practical English Grammar for Intermediate schools, 等のリーダーや文法書を著して後進を裨益した。大正五年には英、米、仏、伊の文学者、思想家、政治家等二十名の小説、座談、日記、書簡、隨筆を集めて訳註を施した「英文藻塩

草」、及び十八、九世紀の英米詩人二十一名の詩三十篇に訳註を付した「英詩藻塩草」を出版。大正十二年富山高等学校創設にあたり初代校長に推挙、ヘルン文庫の購入に尽力した。昭和三年七月二十日、学校行事の水泳に参加中、心臓麻痺で五十七才の生涯を閉じる。

葛西善藏は、明治二十年（一八八七）一月六日、青森県中津軽郡弘前町松森町に生まれた。米の仲買を業とする父に従って一時渡道したが、帰郷後も故郷に定住することなく、東京や北海道を転々とした放浪の生活であった。文学への志向はこの間に育まれた。明治三十八年九月、再度上京して哲学館の聴講生となり、四十一年には徳田秋声の門下生となって、相馬御風、光用穆を識った。この光用との交友は、やがて広津和郎、谷崎精二、舟木重雄、相馬泰三らと共に雑誌「奇蹟」の同人となるにいった。 「奇蹟」創刊号に処女作「哀しき父」を掲載。大正六年「贗物」、及び翌年の「子をつれて」は彼の出世作となった。殊に後者は、瑣末な身邊を扱いつつながら無韻の詩となっていて、作品中最も高い峯の一つと評された。以後「不能者」「不良児」「椎の若葉」「湖畔手記」などを発表して名声を得たが作品の基調は、いづれも人情の支配する家から遁走する事によって、自己のエゴイズムを守り、しかもなお、貧困と酒と孤独の中で味う敗北の屈辱感に悩むといった一種の心理錯綜の心境をうたい上げたものであった。又これらの作品に漂う野趣と苦淡に満ちた諸譚は作品に独特の風格をそえ、今なお高く評価されている。昭和三年七月二十三日、貧苦と、酒と、病苦の生涯を終えた。享年四十二才。

長谷川零余子は、明治十九年（一八八六）八月二十日群馬県佐波郡境町に生まれた。明治三十四年毛陽学校卒業後上京、薬種屋の住み込みや、文選などをしながら正則英語学校に通う。石島鶏子郎や平福百穂らと回覧俳句雑誌七草会に俳句を発表して本格的に作句を志し、「万朝報」「ホトトギス」に投句、虚子の抛る「ホトトギス」には三十九年以来東京俳句界の常連となって例会、句会に出席。四十二年三月長谷川家に婿養子となりカナと結婚、この頃松根東洋城選の「国民新聞」にも俳句を発表。四十三年明治薬学校、大正四年東京帝國大学模範薬局勤務。その前年「ホトトギス」地方句の選者を依頼、又「東京日日」俳壇の選者となった。彼の初期いわゆる「ホトトギス」時代の句は多くはモデレートで、純粹な客観句である。しかし無村調の写生にあきたらず「ホトトギス」から離れ、大正十年俳誌「枯野」を発行。「自然觀照」を其脚とし温故知新の正道にもとずいて新らしき力ある俳句をめざした。翌年第一句集「自然へ避難して」を刊行。その後芭蕉や子規にも抛らない大正の時代が生んだ新しい俳句をと俳句の立体論を提唱し自然を求めて句作の旅に出、日本全道に「枯野」の名声をひろめた。十三年第二句集「雜草」を出版、十五年には上州吾妻高原で俳句の林間学校開催、実作の上で自然の空間性と時間性を促らえようと試み、俳論の「立体俳句論」確立を期した。農民俳句、家庭や婦人俳句等の生活俳句の振興普及にも意欲をもやしたが、昭和三年旅中病を得、七月二十七日腸チフスで死亡。享年四十一歳。

牧水若山繁は、明治十八年（一八八五）八月二十四日、宮崎県東臼杵郡東郷村坪谷に生まれた。延岡中学校時代

より、「秀才文壇」「文庫」などに短歌や散文をつぎつぎ投稿、「明星」の歌や藤村、泣菫の詩を愛読、三十七年四月上京早稲田大学に入学。同期生に土岐善麿、北原白秋、服部嘉香、人見東明一年上に片上伸、相馬御風らが在籍、在学中尾上柴舟の門に入り、車前草社同人となって夕暮、露風らと作歌に精進。四十年「新声」に關係して短歌を掲載、翌年処女歌集「海の声」を自費出版。同年早稲田大学卒業。四十三年第二歌集「独り歌へる」を出版、青春の感傷をうたう。三月短歌雑誌「創作」を発行。白秋、夕暮、柴舟、哀果らの特色ある作品で注目され、四月「別離」四十五年「路上」を刊行するに及んで歌壇に名声をはせた。その五月、太田喜志子と結婚、七月父の死去にあい、その去就や生活の困窮に苦しむ。第四歌集の「路上」には当時の沈静した生活の陰影をおとしている。寂寥を歌と酒で癒そうと、三浦三崎や九州周遊の旅に出、郷里宮崎に滞在。「死か芸術か」「みなかみ」「秋風の歌」「朝の歌」など歌集を次々刊行。破調や定型律の歌、晩年には「酒の歌」「旅の歌」等一洙の感傷を平明に詠いあげて所謂牧水調を完成、美しい韻律は今なお万人に親しまれている。歌集の他に「和歌講話」（大六）や散文集「海より山より」（大七）、紀行文集「比叡と熊野」（大八）等がある。大正九年田園生活に憧れ沼津に移住、断絶しながらも「創作」を発行。昭和三年九月十七日急性腸炎肝臓変症で四十三歳で死去。

広津柳浪は、文久元年（一八六〇）六月八日、長崎材木町に生まれた。代々有馬藩士で儒者や医者が出、祖父は柳浪と号して「朝顔日記」を書いた。明治七年一家上京、彼は番町小学校を卒業し、父の医業を襲ぐため

東京大学医学部予備門に通ったが病気で挫折。実業家を志して大阪商法会議所の書記見習となったが肌にあわず再び上京。十六年両親に死別、頻繁に吉原に通い、「放縦不羈で箸にも棒にも掛らない」五年間の官吏生活に終止符を打ち、十八年農商務省を退職。一時上州館林へ出かけたつもりもした。二十年六月、処女作「女子参政暨中楼」を「東京絵入新聞」に連載して文壇に登場。翌年博文館に入社、「やまと錦」の編輯を担当、同年暮、尾崎紅葉を知り、硯友社の一員となった。二十二年十月「残菊」を発表。時流を抜いたすぐれた心理小説と文壇に認められ、ついで「小文学」「江戸紫」を編輯。翌年、東京中新聞に入社、「おち棒」等の小説を連載した。二十八年「変目伝」「黒蜷蜒」「亀さん」を発表、悲惨、深刻小説の代表作家と目された。これらは不具者のごとき悲惨醜惡な人物を主人公とし、欠陥ゆえに悲劇を招き身を亡ぼすといった悲惨の強調を作の主要な意図とした。翌二十九年「今戸心中」「河内屋」「信濃屋」等を発表、これらは悲惨小説の異常性から離れ、会話を中心とした客観的な写真で、心理描写に冴えを示す。三十五年「雨」の描写等は自然主義文学の先駆ともいえよう。その他軍事物、狂女物、社会小説等長短二百余の作品を新聞雑誌に発表した。自然主義文学全盛になるにおよんで柳浪ら旧作家は後退。長い療養生活の後、昭和三年十月十五日、六十七才をもってその生涯を閉じた。

(昭和女子大学近代文学研究室)

凡 例

一、研究調査に着手してから本叢書刊行に至るまで、凡そ二十二年を要しているので、指導者中で岡田哲藏、福井久藏、池田龜鑑、金子健二の四先生はすでに鬼籍に入り、研究担当者中にも病でたおれたものが数名ある。本叢書をこれらの人々に見てもらったならばさぞおよろこび下さるであらう。謹んで霊前に献上する。

二、本叢書は卒業期に近い学徒の中から担当者を選び、調査研究の範囲、方法、次第などを相談して、先ず第一に業績の検討に着手した。不明、疑問、困難、迷路などにつき当りつつ一年ぐらいするうちに明瞭になるので、次の年から生涯と遺跡を究めてからいよいよ論文作成にとりかかった。このとき、材料の批判、整理、布置、論文の構成などについて相談しながら脱稿に至る。ついで修訂、校閲を経てから編集という順で、その間約二カ年が費される。

三、収録事項の研究に対し、直接間接に協力した学徒は延三千名に上るが、その協力と、歳月の恩恵に加うるに学界、文壇、教育界、操觚界など各界先輩の懇切な教示と、遺族及び関係者の好意を感謝する。

四、年表で著作というのは、発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを指し、資料とは、第三者の考説、論評、感想等の文献を指すのである。従って死後刊行された全集物や編集物は著作年表に、第三者の解題や解説の如きは資料年表の中に収めた。又、単行本の中での編集物は、所要の小題を書題名欄に、書名